

課題名：平成30年7月豪雨における土砂災害の特徴と今後の課題

発表者：広島大学 防災・減災研究センター センター長 土田 孝

《質問》

今回の災害では、黒瀬町等で見られる緩傾斜地での土石流も発生しています。この原因等、私見でも良いのでお聞かせ願いたい。

《回答》

確かに今回緩い勾配の斜面で多くの土石流が発生していることは注目する必要があると思います。

この点については、講演で十分説明する時間はありませんでしたが、内田准教授らの研究が注目されると思います（小橋力也，北真人，内田龍彦，梶昭仁，宮田英樹，河原能久：土石流危険度予測のための源頭部における豪雨時の雨水浸透過程に関する研究，河川技術論文集，第25巻，pp.669-674，2019年6月.）。

これは昨年の豪雨災害時に7月6日の20時頃と7日の5時頃に地盤内の水温が急激に下がったことを観察したという報告です。これはあきらかに基盤内から表層に水が浸透したことを示しています。深さ90cmのところでもまず水温が低下し、その後30分以上経過して深さ60cmで低下していますので上向きの水の浸透があったことが確認できます。

このように山体の基盤（岩盤）からの水の供給が緩傾斜の地盤で土石流が発生した一因とも考えられます。